

氏名	杉本 厚夫		
学位の種類	博士（学術）		
学位記番号	博乙第 2770 号		
学位授与年月	平成 27年 12月 31日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	青少年期のスポーツ集団における社会学的アンビバランス —構造生成の視点から—		
主査	筑波大学教授	教育学博士	菊 幸一
副査	筑波大学教授	教育学博士	清水 諭
副査	筑波大学教授	教育学博士	西嶋 尚彦
副査	筑波大学教授	博士（教育学）	手打 明敏
副査	筑波大学教授	博士（心理学）	庄司 一子

論文の内容の要旨

（目的）

本研究の目的は、青少年期のスポーツ集団に生起する役割期待と行動規範における社会学的アンビバランスの諸相から、集団の構造生成に働くメカニズムとその影響を明らかにすることである。

（対象と方法）

1) 遊び集団、2) エリートアスリート集団、3) 学校運動部集団、4) 体育学習集団の4つのタイプの青少年期のスポーツ集団を対象とし、1) についてはフィールド調査による解釈学的視点の適用によって、2)、3)、4) については質問紙調査法による経験的データを、因子分析、数量化理論第Ⅱ類、第Ⅲ類、クラスター分析などの多変量解析の適用によって、それぞれ社会学的アンビバランスの諸相と構造生成のメカニズムについて解釈し、実証しようとした。

（結果）

遊び集団では、子どもたちの生活世界における役割期待や行動規範が、遊びの現実のフレームを崩して入り込むことによって、逸脱的行為にネガティブ・フィードバックがかかり、社会学的アンビバランスを回避するメカニズムが働いていることが明らかになった。また、遊び集団が小集団化し、その集団における役割期待や行動規範が固定化してしまい、新たな成員による社会学的アンビバランスを契機と

して、遊び集団を構造生成することができなくなっているといえる。さらに、遊びの教育的効果のある要素（競争と模倣）だけを取り出すことで教育的逸脱行為（賭けと偶然）を排除し、学校制度の中に遊びを取り込むことは、遊びにおける社会学的アンビバランスあるいは逸脱的行為を回避し、構造生成のメカニズムが働かないようにしているといえる。

エリートアスリート集団では、根性を鍛える「精神主義」という非科学性、「道」精神といった道徳性、異議申し立てできない忠節性に社会学的アンビバランスがみられた。そこには、エリートアスリート集団特有の競技力向上を目的とした機能的集団としての価値観と、その延長線上にある勝利至上主義の考え方が存在するといえる。また、能力性が道徳性を凌駕するアノミー（勝つためには手段を選ばない）現象の存在が認められた。しかも、忠節性でみられた「自己主張型」と「集団献身型」が、エゴイズムと全体主義という形で表出し、それらは全象限を貫通する集団への自己包絡（involve）に対する不信感を媒介として、アノミー現象へと繋がっている位相が推定された。

学校運動部集団では、努力、継続、尊敬、信頼といった教育的役割期待に対する社会学的アンビバランスが変容しないこと、さらに男子の場合は、その集団における教育を施す権威（指導者）に対する社会学的アンビバランスが変容しないこと、また、中学・高校運動部員が一貫して先輩・上級生への服従に対する社会学的アンビバランスを有していることから、伝統的な集団構造は変容しないことが明らかになった。ただし、女子マネージャーのジェンダー役割にみられるような現代的な問題における社会学的アンビバランスに対して、ポジティブ・フィードバックがかかり、これまでの固定的な役割期待から逸脱化するようなメカニズムが働いたときには、新たな役割期待が生み出され、構造生成する可能性が考えられた。

体育学習集団では、社会化される生徒が、その社会化の重要な他者である教師に対して、逆らってみても集団の構造が変わるわけではなく、教師に従順であることが何より有効な戦略であると考えられるために、体育学習集団の成員（生徒）に社会学的アンビバランスは生起しにくく、集団の構造生成が起こることはほとんどないといえる。ただし、学習指導要領における目的の変遷をみると、生徒の「体育嫌い」や「体育離れ」という逸脱的行為にポジティブ・フィードバックがかかり、逸脱化のメカニズムが働くことで学習指導要領が改訂され、その役割期待と行動規範を変容させる契機となった。

(考察)

遊び集団は、常に社会学的アンビバランスを孕みながら構造生成を繰り返す集団であると仮定したが、このことは支持されなかった。ただ、社会学的アンビバランスを回避するというメカニズムが働き、構造生成というよりも、むしろ遊び集団自体の構造を形骸化させることで、集団を維持しようとする状況がみられたことは新たな知見であるといえる。

エリートアスリート集団は、競技力向上という明確な目的で集められた機能的集団であり、常に革新的な役割期待や行動規範を創りだしながら構造生成しやすい集団であると仮定したことは支持された。つまり、能力性と合法性が、忠節性と道徳性を凌駕することによって、勝利に対してはポジティブ・フィードバックがかかり、勝つためには手段を選ばないという役割期待と行動規範が形成され、勝利至上主義の集団へと構造生成したと考えられる。

学校運動部集団は、競技力向上及びスポーツ選手の養成という社会的役割期待と、学校教育における課外活動としての教育的役割期待との矛盾によって惹起される社会学的アンビバランスに対して、伝統的な価値観を堅持することによって、構造維持に向かう集団であると仮定したことは支持された。つまり、学校運動部集団が伝統的に堅持してきた上下関係による役割期待や行動規範が、競技力向上に対し

審査様式 2-2

てネガティブ・フィードバックをかけ、社会化するメカニズムが働き、教育的集団の構造を維持しようとしているのである。

体育学習集団は、学校体育の授業によって形成される制度化された集団であり、学習指導要領によって、社会学的アンビバランスあるいは逸脱的行為については、ネガティブ・フィードバックがかけられ、社会化するメカニズムが働き、構造維持に向かう集団であると仮定したことは支持された。つまり、集団における社会学的アンビバランスや逸脱的行為に対して、ネガティブ・フィードバックをかける教師との関係性が制度として固定化されているため、集団は構造維持されているといえる。ただし、既存の役割期待や行動規範に対して成員が社会学的アンビバランスを持ち、それを契機として逸脱的行動が表出した場合に、指導者や管理者がその逸脱的行為を受け入れ、新たな役割期待や行動規範を構築するように対処したときには、スポーツ集団は構造生成することが示唆された。

審査の結果の要旨

(批評)

本研究は、今日、青少年期におけるスポーツ集団内に生起しているさまざまな社会的な病理現象（例えば暴力、いじめ、ハラスメント等の諸問題）に対して、集団社会学の諸理論にもとづく社会学的アンビバランスの概念を駆使し、それがもたらす集団生成への影響を集団論として論じた点が高く評価される。すなわち、従来の要因論では個人間（ミクロレベル）や制度間（マクロレベル）による因果関係の追究が主であったこの種の研究視点に対して、集団の構造維持・生成というメゾレベルの研究視点の重要性を指摘したオリジナリティーが高く評価されるのである。このような視点から、特に、従来の行為論では「逸脱」が集団維持にとってネガティブなフィードバックとしてしかとらえられなかった見方に対して、むしろそれが新たな集団生成に向かうポジティブなフィードバックとしてとらえられることを解釈し、実証した点は、今後のスポーツ集団研究にとって非常に重要な示唆であると評価された。

また、研究対象とした4つのスポーツ集団を解釈し、検証した結果、遊び集団の集団生成機能が形骸化している点や体育学習集団に働く両義的なフィードバック機能がもたらす可能性など、今後の集団生成を考える上で新たな知見や課題も見出されている。

平成 27 年 10 月 27 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

なお、学力の確認は、人間総合科学研究科学学位論文審査等実施細則第 11 条を適用し免除とした。よって、著者は博士（学術）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。